

新体制で挑むシーズンが開幕!
福住はメーカー、チーム移籍後の初レースで6位入賞
小林はトラブルに泣き19位フィニッシュ

2024 全日本スーパーフォーミュラ選手権 第1戦 レポート

開催日程	2024年3月9日(土)/3月10日(日)	開催場所:鈴鹿サーキット(5,807km)
大会名称	2024年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第1戦(31周/参加台数:21台)	
天候/気温	3月9日(土):晴れ→曇り/気温8度 3月10日(日):晴れ/気温12度	
観客動員数	3月9日(土):13,000人 3月10日(日):20,000人 計:33,000人(主催者発表)	

KCMGは国内トップフォーミュラ参戦15年目の節目となる今シーズンも「Kids com」とともに、引き続き「Kids com Team KCMG」として戦う。マシンカラーリングは昨年までのポップな配色から一新し、コバルトブルーとブラックのバイトーンでクールなカラーに変更した。チーム体制も大きく変更。チームオーナーはポール・イップ、代表は土居隆二と変わらないものの、土居はチーム監督も兼務する。チーム総監督にはメインパートナーである「Kids com」の代表取締役である西山悟氏が就任。そして、チームアンバサダーに松田次生、チームコーディネーター兼リザーブドライバーに関口雄飛が加入し、勝てる強いチーム作りに向けて底上げを図った。ドライバーは8年目のタッグとなる小林可夢偉が今季も7号車。8号車(今季から8に変更)にはトヨタ陣営に移籍となった福住仁嶺を起用した。

2月の合同テストから約2週間のインターバルを経て、3月上旬という異例の時期に開催となった今シーズンのスーパーフォーミュラ開幕戦。今年も2輪レースとの併催の「2&4レース」として行われ、幕開けにふさわしい賑やかな雰囲気となった。共通ダンパーの採用など、クルマも変化がある中、チームにとって悲願の初優勝、初タイトル獲得を達成するべく、心強く豪華な布陣で挑む。

第1戦 予選:3月9日(土)

天候/気温/路面	晴れ→曇り / 気温:8度 / 路面温度:18度 / 路面コンディション:ドライ
#7 小林 可夢偉	Q1A組:7位 / 1'36.840
#8 福住 仁嶺	Q1B組:6位 / 1'36.518 Q2:7位 / 1'36.156

真冬のように寒く、曇りがちな空からは時折雪がちらつき、そうかと思えば陽が差し込むような天候で予選Q1がスタートした。気温は8度、路面温度は18度というコンディション。15時05分、Q1A組に出走したのは小林だ。ユーズドタイヤで路面コンディションを確認するとニュータイヤに履き替えてコースに向かった。気温も路面温度も低い中で丁寧にタイヤを温めていく。朝のフリー走行よりもマシンに手ごたえがあったが、デグナーコーナーでシートが動いてしまい、その影響で縁石にマシンを引っかけってしまった。これでコンマ3秒ほどロスをしたと思われる。シートの問題は2月のテストでも起こり、対処したものを小林も確認し、見た目には不具合はなかったのだが、走行を繰り返しているうちに再び発生してしまったようだ。Q2へ進む自信はあったが残念ながら7番手(1'36.840)でQ1敗退。最終的には14番手となった。

5分間のインターバルを経て、15時20分にQ1B組スタート。福住も小林同様、ユーズドタイヤからニュータイヤに履き替えてアタックへと向かった。フリー走行が今一つだったため、関口コーディネーターや笠井エンジニアの助言をもとにクルマを見直した結果フィーリングは良くなり、5番手(1'36.518)でQ2進出を果たした。

15時40分、Q2スタート。通常は7分間だが、今回は気温と路面温度が低いため、10分間で行われる。10分間のインターバルで少しセッティングをアジャストして臨み、福住は7番手タイム(1'36.156)をマーク。セクター3と4はポールポジションを獲得したドライバーよりも速かったが、ポールポジションには届かなかった。もう少しタイムを削りたかったという悔しさが残る予選となった。

第1戦 決勝:3月10日(日)

天候/気温/路面	晴れ / 気温:12度 / 路面温度:22度 / 路面コンディション:ドライ
#7 小林 可梦偉	19位 / 53'21.624 / 1'40.353 (28周 完走)
#8 福住 仁嶺	6位 / 57'30.627 / 1'40.011

気温12度、路面温度22度、前日より暖かくなったが、メインストレートに吹く強めの風が冷たく、やはり寒い中での決勝となった。併催の2輪レースで赤旗が提示されるなどしたため、当初の20分遅れの14時25分にレースがスタート。7番グリッドからスタートした福住はオープニングラップで#5 牧野選手の先行を許してしまい、8番手に。14番グリッドスタートの小林も1台パスしたが2台にかわされてしまい、1つポジションを落してしまった。2周目、他車にアクシデントが起きたため、セーフティーカーが導入された。

5周終了のタイミングでレース再開。8番手走行中の福住は7周目のシケインで#6 太田選手をアウト側からオーバーテイク。7番手にポジションを上げる。10周を終えてピットウインドウが開くと福住は11周終了のタイミングでピットイン。素早くタイヤ交換を済ませ、タイヤ交換を終えたクルマの中の2番手でコースに戻ったが、なかなかフロントタイヤが温まらずペースを上げられずにいた。16周目のシケインで牧野選手をとらえると11番手に浮上。その後は牧野選手の猛追を受けるが、しっかりポジションを守った。他車のピットインの関係で6番手までポジションを上げていた福住。26周目にはしばらく接近戦を展開していた#65 佐藤選手にかわされ、7番手に後退してしまう。27周目に全車のタイヤ交換が完了すると福住は6番手。うまくレースペースを上げられずにいたが、何とか6位のポジションを守り切りチェッカーを受けた。福住はメーカー、そしてチーム移籍後初めてのレースで見事入賞を果たした。

13番手からリスタートした小林は他車のピットインの関係で4番手まで浮上し、18周終了のタイミングでピットイン。こちらも素早くタイヤ交換を済ませると、16番手でコースに復帰した。小林は前を走る#12 三宅選手にじわじわと迫っていき、23周目のスプーンコーナー手前でかわすと13番手に浮上した。ここからポイント獲得を目指して懸命に走るが、28周目に突然タイヤに違和感を覚え、スローダウン。ピットには自力で戻ってきたが、ホイールナットが外れるトラブルに見舞われ、小林はここでマシンを降りることとなった。規定周回数は超えていたため19位での完走扱いにはなったが、トラブルに泣く初戦となってしまった。

次戦の舞台は九州大分のオートポリス。まったく異なるコンディションでの戦いに向けて今一度立て直しを図り、全力で挑む。

ドライバーコメント

7号車 小林可夢偉選手

予選はクルマが良くなったのでQ2に行ける自信があったのですが、Q1のアタックラップ中にデグナーひとつめの手前でシートが動いてしまい、タイムをかなりロスして満足なアタックができず終わってしまいました。シートが動いていなければ問題なくQ2に進めていたと思います。前回のテストでもシートが動いていたので、チームには対応をお願いしていたのですが、予選前のフリー走行でも同じトラブルがあって、結局予選でも直っていませんでした。決勝レースはクルマのパフォーマンスが予選ほどではなく、タイヤにも厳しかったです。最後は左フロントタイヤのホイールナットが外れてしまい、完走できませんでした。予選、決勝ともにトラブルが続いているので、次戦ではとにかく普通に戦えるようにチームと準備をしたいと思います。

8号車 福住仁嶺選手

フリー走行がうまく行かなかったことで見えて来たこともあり、予選ではチームのみんなから助言をもらって変えていったことが良い方向に出ました。ただ、トップを狙うクルマではないです。まだ課題はたくさんありました。決勝はダウンフォースを削って、ストレートスピードを稼ぐ方向にしました。順調に走っている10周くらいからのタイヤの落ち幅も大きいです。今日のレースは追われる立場が多かったので精神的にも疲れしました。チームとも楽しくやっていますし、是非このチームで勝ちたいです。

チームアンバサダーコメント

松田次生チームアンバサダー

予選は、小林はシートに不具合があってQ1を通過できませんでしたが、福住はトップとコンマ4秒差でQ2まで行ってくれました。ポールポジションを獲得したクルマよりもセクター3、4は速かったので、ポールを獲得するクルマにしていきたいです。小林はマイナートラブルのないように…。決勝は、小林にはハブトラブルが起きたりなど、レースをさせてあげられていないので、しっかりした体制が必要だと思います。福住は戦略的には上位と変わらないのですが、アウトラップが悪くて順位を落とし、またタイヤのデグラデーションが多くて苦しいレースとなりました。最後はどうか6位でポイントを持ち帰ってきてくれたので良かったです。チームも良い雰囲気になっていますので、3位4位まではレースペースを何とかしないといけなと思っています。また、うちのチームには良いエンジニアがいますので、しっかりともう一回クルマを見直さないといけません。そうしないと夏場に弱い、昨年と同じ結果になってしまいます。勝つためにクルマづくりをしっかりとやって、優秀な2人のドライバーと結果を残したいです。